

ワールドワーク

赤穂事件

—赤穂事件のゆかりの場所を訪ねてみた！の巻—

横浜歴史研究会 2024年4月

飯山 晴美

本日のお題

はじめに

1. とにもかくにも事件は起こった！

- 1-1 確認しよう、事件現場の今
- 1-2 独断と偏見で勝手に考察

2. なんだかんだ言っても討ち入った！

- 2-1 赤穂浪士たちはどこをどう歩いたのか
- 2-2 引き上げルートを歩いた感想

はじめに

赤穂事件は、元禄14年3月14日(1701年4月21日)に播州赤穂城主浅野内匠頭長矩が高家筆頭吉良上野介義央に松の廊下で刃傷に及んだ事件と、翌元禄15年12月14日(1703年1月30日)に、旧浅野家の家臣大石内蔵助以下47人が吉良邸に討ち入り、亡き主君に代わり吉良上野介を討った事件です。

実像については不明な部分が多く、現在に至るまで議論は尽きません。
今回は謎の探求ではなく、赤穂事件の現場とその距離感を体感することを目的に、東京都内のゆかりの場所を歩いた結果をレポートしたいと思います。

発表用のスライドに用いた地図はgoogleMAPを利用しています。
また、スライドに用いている古地図や絵図はすべて国立国会図書館デジタルコレクションからダウンロードし利用しています。公開範囲は保護期間満了のもののみです。

1. とにもかくにも事件は起こった！

1-1 確認しよう、事件現場の今

Googleマイマップで作成。公開しています。

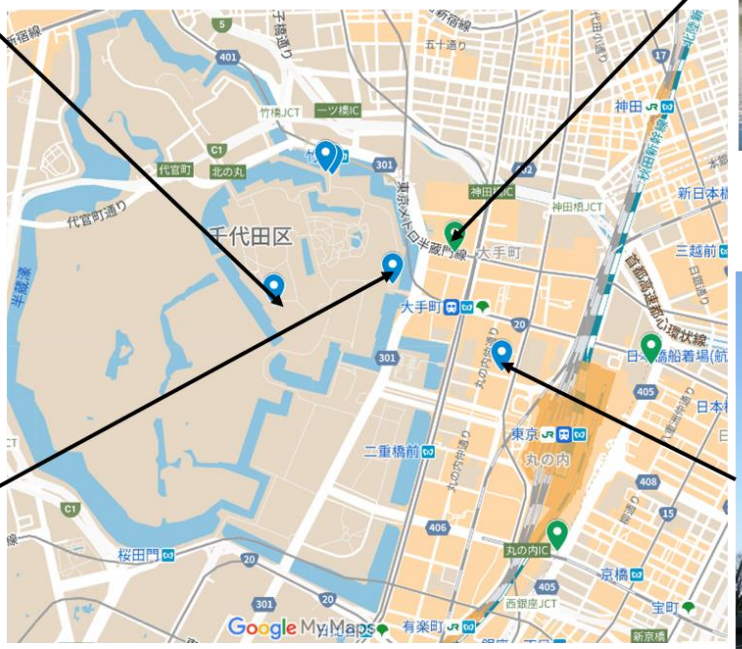
<https://www.google.com/maps/d/edit?mid=1PVjvMPZjvBGe-ab4aSp-1wuZN-jg4zs&usp=sharing>

■ 松の廊下事件まで

松の廊下跡です。
目付の多門伝八郎に松の廊下の事件が知らされたのが午前11時頃でした。



大名たちが江戸城に登城する際に使っていた大手門はここです。総登城日だと大手門の前は大混雑になります。40万石ぐらいの大名だと80人ぐらいの行列で登城をしますし、格上の大名の行列には道を譲らなければなりませんでした。



大手門の前に到着した行列は「下馬」と書かれた札が立てられた場所で大半が留まることとなります。
下馬札があった場所がこのビルの辺りです。当時は広場となっていて、多くの家臣はここで殿が戻ってくるまでひたすら待ちます。
待っている間の家臣達がする批評や噂が下馬評という言葉の元となっています。



伝奏屋敷
天皇の使いである勅使と上皇の使いである院使が江戸滞在中に滞在した建物です。
東京駅丸の内北口を背にして右斜め前を見ますと日本興業倶楽部の建物が見えます。
伝奏屋敷は日本工業倶楽部のビルとこの横の三菱UFJ信託銀行本店のビルの一帯だったようです。

■ 吉良邸付近



吉良上野介の屋敷は呉服橋御門内にあったと言われますが、東京駅八重州口をでて左側、現在鉄鋼ビルディングが建っている一帯です。この先に一石橋があり、この橋を渡ると日本銀行、江戸時代の金座という位置関係になります。



この道は外堀通り。その名の通り、江戸時代は「堀」でした。

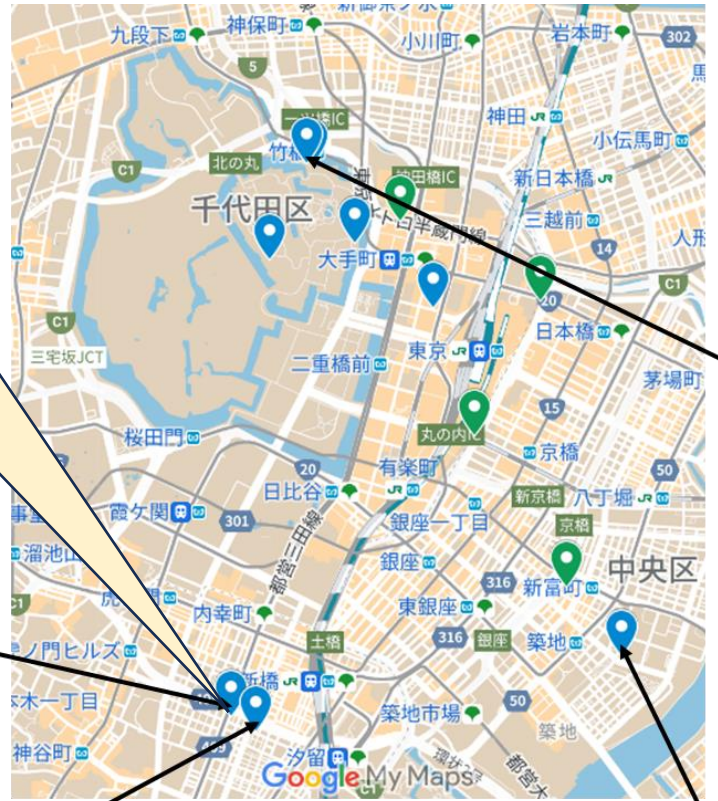
吉良上野介が生まれた時は鍛冶橋御門側、このビルと東京国際フォーラムのあたりに屋敷がありましたが元禄11年9月6日に起こった大火で焼けてしまったので、呉服橋門側に新しい屋敷を建設し移ります。このときの屋敷の建設費は上杉家から8000両の資金援助があったとのこと。これ以外にも上杉家は吉良家へたびたび援助を行っており、上杉家の財政を逼迫させる原因になって言われています。吉良上野介が呉服橋門の屋敷に移って2年で松の廊下の事件が起こります。せっかく建てた屋敷に吉良上野介が住んだのはわずかな間だったのです。

■ 浅野内匠頭切腹まで

田村右京大夫の屋敷は、新橋駅の近くのこのあたり。



現在の日比谷通りの脇に浅野内匠頭終焉之地の碑がたっていますが、虎ノ門一帯の再開発により実際の場所とは変わっています。



浅野内匠頭屋敷跡



泉岳寺には浅野内匠頭が切腹の折りに血がかかった「血染めの梅」が植えてありますが、浅野内匠頭が切腹したのは田村家の庭のおばけイチョウと呼ばれる大きなイチョウの木の近くであったという話があり、その場所には「田村イチョウ稲荷」が祭られていました。これも再開発により現在は、切腹最中で有名な新正堂さんの工場ビルにミニチュアサイズになって残されています。

浅野内匠頭が江戸城から出たのは平川門。

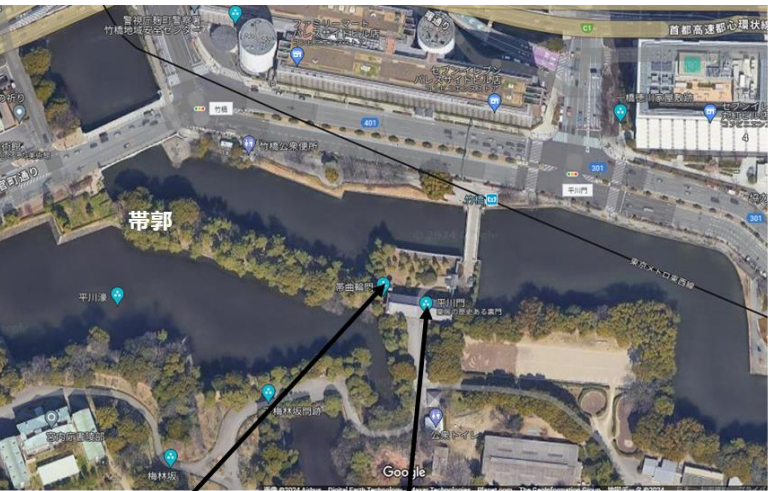


平川門 渡櫓門

松の廊下事件	
08:00頃	浅野内匠頭 伝奏屋敷を出発
～11:00	浅野内匠頭 松の廊下で吉良上野介に刃傷
11:00頃	多門伝八郎に事件が伝えられる。
～13:00	斎戒沐浴後に徳川綱吉に事件が伝えられる
13:00頃	徳川綱吉が浅野内匠頭の田村右京大夫邸受け入れを命令 老中会議が開かれ、浅野内匠頭の処分を検討 徳川綱吉が厳罰を独断決定
15:00頃	田村右京大夫邸から浅野内匠頭受け取りの使者出発
17:00頃	赤穂への急使として早水藤左衛門、萱野三平が浅野家江戸屋敷を出発
18:00過ぎ	浅野内匠頭 切腹
夜半	赤穂への第2の使者として原惣右衛門、大石瀬左衛門が内匠頭切腹の知らせを持って浅野家江戸屋敷を出発

1-2 独断と偏見で勝手に考察

■ 浅野内匠頭が使った不浄門はどこだ？！



平川門は病人や罪人を城外に出す「不浄門」であったとも言われていますが、そもそも平川門は元和6(1620)年に伊達政宗ら6名の大名によって作られた三の丸の正門です。正門が不浄門だったのかというのは疑問に思うところです。

平川門を詳しく見てみましょう。平川門は、城内から渡櫓門を出て右手に向かい高麗門という作りになっています。渡櫓門を出て左側にもう一つ、帯郭門があります。この帯郭門が不浄門であり、浅野内匠頭はここから出されたと説明されている資料が多いです。



左の写真は皇居東御苑のお土産屋さんにかかっていたパネルですが、「病人カゴ此口ヨリ出ル」と書いてあります。なるほど、ここが不浄門かと納得しそうになるのですが、よく見ると帯郭は竹橋門に繋がっているのです。帯郭門から出ると、城外には竹橋門から出ることになってしまいます。また、現在見ることのできる帯郭門は、松の廊下事件当時は無かったそうです。

浅野内匠頭が通った不浄門、ますます謎です。

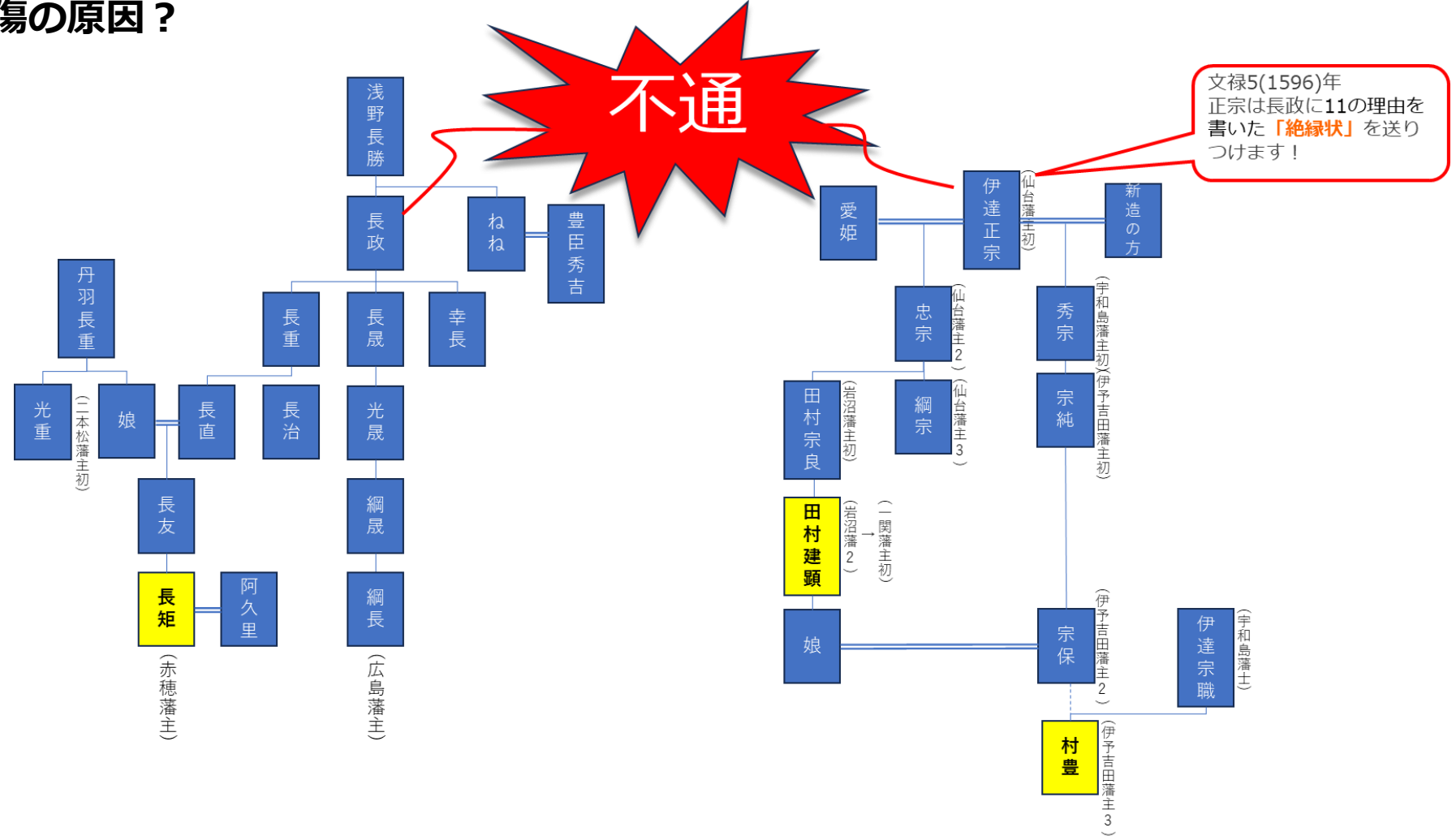


千代田東京netというHPに「浅野内匠頭は平川門から出され船で運ばれた」と書かれていて、大変興味深く思いました。確証を持てる資料は見つけれませんでした。松の廊下事件当時の平川門には階段で堀に降りられ、船が着けられるような場所が設けられていたようです。

平川門の辺りは江戸城の内堀と外堀である日本橋川が一番近い場所でもあります。徳川時代の日本橋川は下流から江戸橋、日本橋を逆上り一石橋に至り、ここから真直ぐに江戸城の内濠まで道三濠を掘削し、舟の往来が出来るようになっていました。江戸城のし尿も平川堀から道三堀を経て日本橋川を使って葛西の農村部に舟で運び込んでいましたので、罪人も平川堀から舟で運ばれた可能性もあるのではないかと思います。

田村家に残された浅野内匠頭受け取りから切腹までの様子を記録した「浅野内匠頭御預一件」という文書には、浅野内匠頭の受け取りは平川門で行われ、護送の順路は、平川門、大手門前、八代州河岸、日比谷御門、桜田、愛宕下通りを通して田村邸表門となっています。罪人駕籠に乗せた浅野内匠頭を大手門前に横切らせたのでしょうか？田村家の使者は75名でしたが、例えば、目付数名が浅野内匠頭と舟で平川堀をいき、その他は堀に添って警備をし、八代州河岸から陸に上がって田村邸に向かったという可能性はないでしょうか？みなさんはいかが思いますか？

■ 浅野内匠頭刃傷の原因？



当の浅野内匠頭が原因について何も言わなかったので一向に真実はわかりませんが、私が面白いと思う説に、浅野家と伊達家の不通というものがあります。大名どうしの関係には主に姻戚関係で双方が最敬礼で付き合う「両敬」、普通に儀礼を交わす「通路」、藩の成り立ちのいきさつから遺恨があり、明確に断交を宣言している「不通」があります。「不通」は非公式ながら幕府でも認識されていて儀式で不通大名どうしが隣り合ったりしないように配慮されていました。

広島浅野本家と陸奥伊達本家はまさに「不通の間柄」です。勅使饗応役となった赤穂浅野家は広島浅野家の分家に当たりますし、院使饗応役となった伊予の伊達家も陸奥伊達家の分家筋です。本家同士が不通なら、分家同士も不通でしょう。

綱吉の時代は文治政治への転換期であり、「不通大名」を和睦させることに幕府は力を入れていました。岡山池田家は元禄3年頃から山内家や水戸徳川家と和睦していき、元禄11年には前田家と細川家が和睦します。いよいよ元禄14年の正月に、綱吉に重用されていた林大学頭は、老中になったばかりの稲葉正住に「なぜ浅野家と伊達家は代々不通なのか」と訪ねています。その流れで浅野内匠頭と伊達左京介が饗応役に選ばれているのです。分家同士をいっしょに仕事させて本家の不通を解消しようとした幕府の思惑があったかもしれません。幕府の思惑はずれ、大事件が起こります。浅野家と伊達家の仲はますますこじれたのか、両家が和解したのは平成6(1994)年のことでした。

浅野内匠頭お預かりとなった田村家も、伊達の分家であることも言い添えておきたいと思います。

2. なんだかんだ言っても討ち入った！

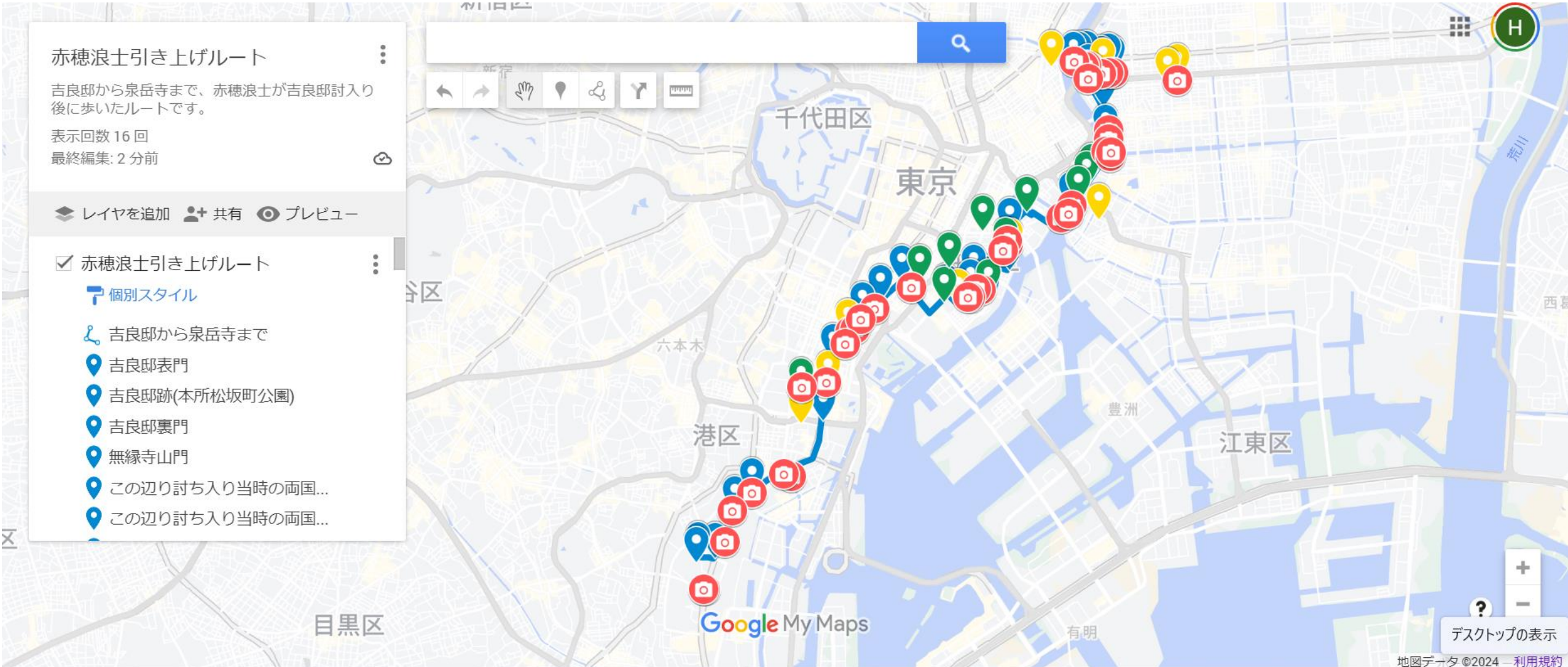
2-1 赤穂浪士たちはどこをどう歩いたのか

Googleマイマップで作成。公開しています。

https://www.google.com/maps/d/edit?mid=1hRPDHWI2I9LaH7CBeajNOCul1cQtJA&usp=drive_link

吉良邸のある両国から泉岳寺のある品川までの道程は12km弱。

赤穂浪士たちは約3時間で歩いた。驚異的な早さである！



■吉良邸付近



吉良邸付近を見てみます。豎川は4代将軍家綱治世の万治2年(1659年)に起工された運河で、江戸の物流を支える役割をしていました。

徳右衛門町1丁目の紀伊國屋店に杉野十平次、武林唯七、勝田新左衛門、林町五丁目の紀伊國屋店に堀江安兵衛、倉橋伝助、木村岡右衛門、岡野金五右衛門、横川甚平、一時期は毛利小平太が住んでいました。

安兵衛たちが吉良邸を偵察するのには、二之橋を使ったのではないかと思います。この辺りは鬼平犯科帳の舞台でもあり、二之橋の袂にしゃもなべの五鉄があった設定になっています。

相生町2丁目の紀伊國屋店に前原伊助、神崎与五郎が忠臣蔵でもおなじみの米屋を営んでいました。両国矢之倉米沢町には堀江弥兵衛が住んでいました。

堀江安兵衛の道場へ武器収集。そこから前原伊助邸へ送るなどに豎川が使われたのではないかと思います。

吉良邸に沿っている馬車道には勝海舟生誕の地や、五郎蔵とおまさが暮らした壺屋などがあり、忠臣蔵と鬼平と幕末のドラマが混ざっている場所です。雪が舞う中、火事装束に身を固めた赤穂浪士たちが吉良邸へと歩く道はこの馬車道かと想像しながら歩きました。

史実の12月14日の江戸は晴天。ただし13日は大雪だった記録が残されているので道に雪は残っていたはずですが、武器を持った47人もが深夜に行進をしていたら通りの人たちが目を覚ましてしまうぐらいの行進音はするはずなので、三々五々、あらかじめ吉良邸至近の前原邸へ集結し討入りに出勤した可能性が高いと最近では言われるようになっています。



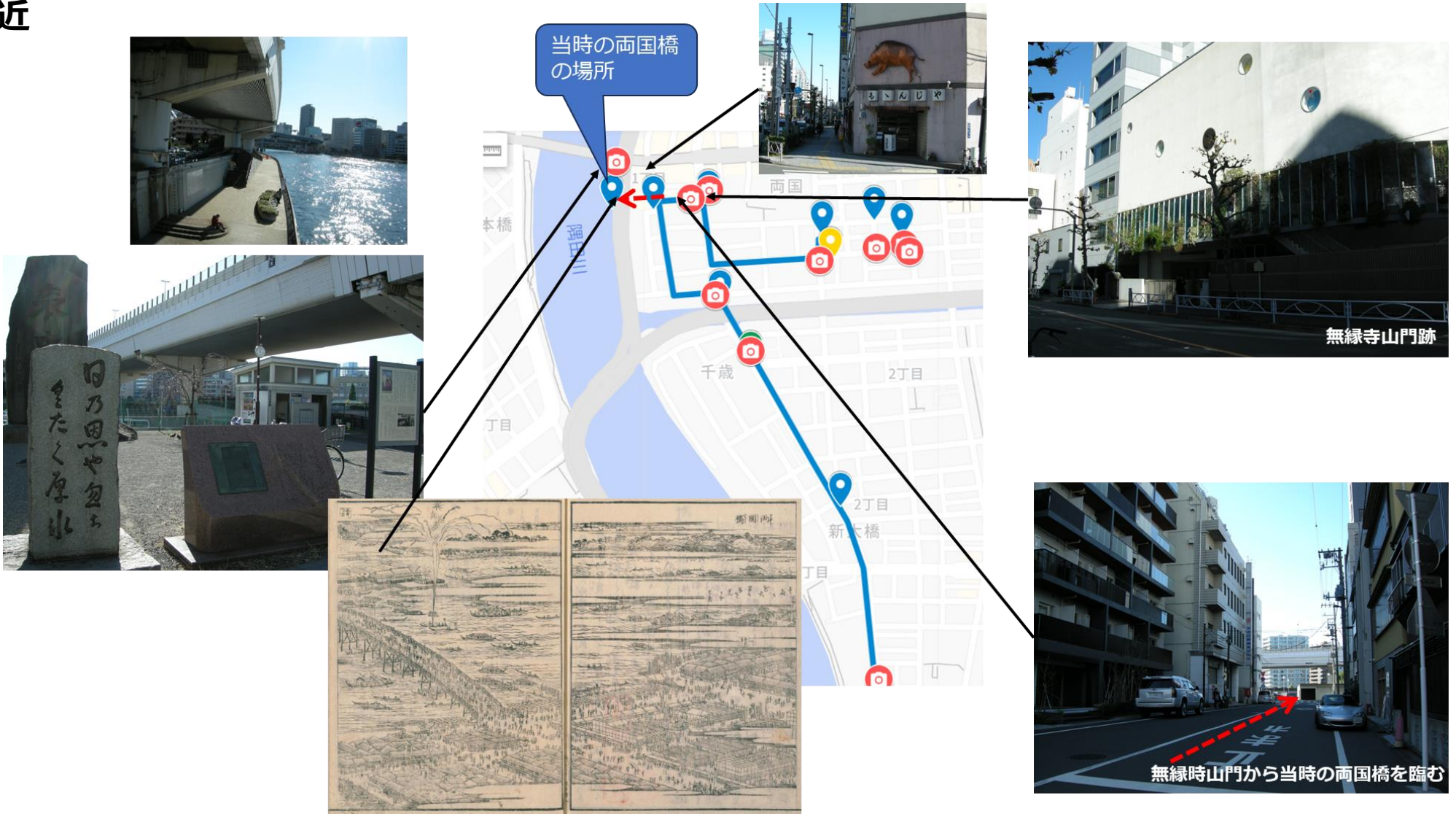
■吉良邸付近



討入りの初めは午前4時頃。
吉良邸の周りには大石内蔵助の一族大石無人、大石三平、堀部弥兵衛の甥堀部文五郎、堀部安兵衛の従兄弟佐藤條右衛門、近松勘六の下僕勘三郎等が援護の体制を取っていたそうです。少し離れた場所には旧浅野家医師の寺井玄達と助手の森助、堀部安兵衛らの剣術の師堀内源左衛門兄弟、その弟子たちが様子をうかがっていたとのこと「佐藤條右衛門覚書、勘三郎文書、堀江文五郎書状」に書かれています。結構な関係者が集まっていたようです。

吉良邸跡の本所松坂町公園は土屋邸と本多邸の敷地に入っているような気がします・・・
大川屋に吉良まんじゅうが売っています。吉良邸跡を眺めながらおまんじゅうを食べました。きなこ餡で甘すぎず美味しかったです。

■ 両国橋付近

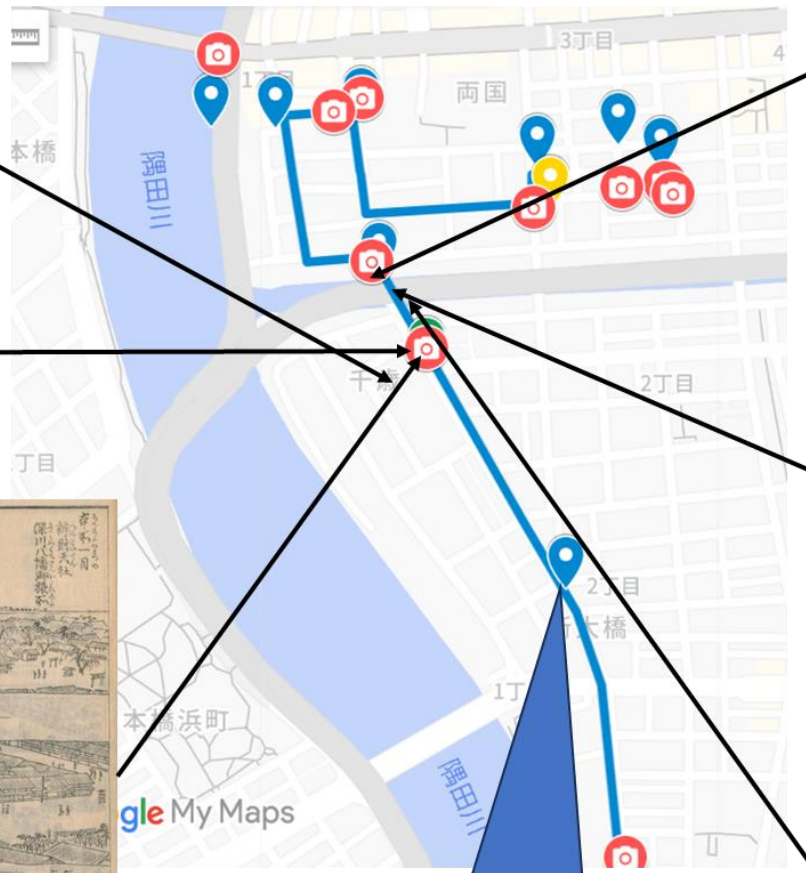


討入りが終了したのは午前6時頃。裏門の外では心配していた各々の親戚達が一党を迎え、近松勘六の下僕甚三郎は皆に餅とみかんを配っていたとのこと。赤穂浪士側の怪我人は寺井玄達により処置されたようです。

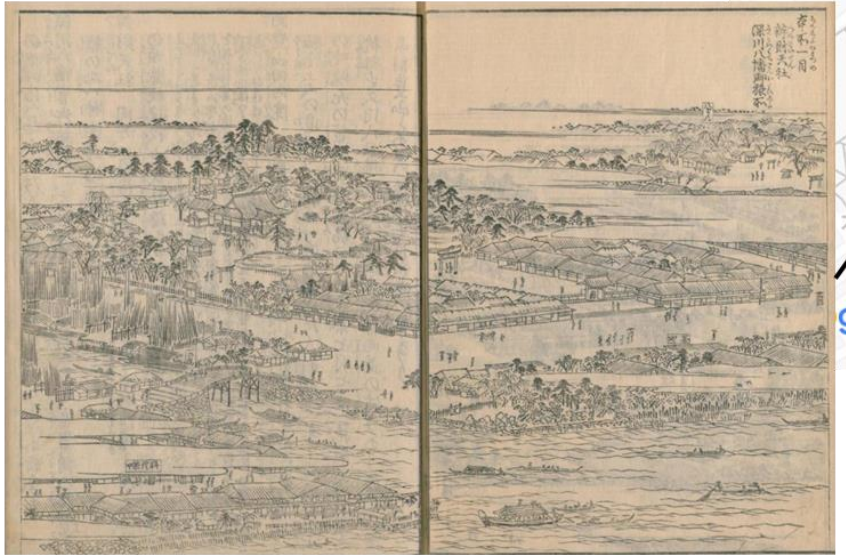
一行は吉良家の巻き返しと上杉家の討手を考え無縁寺(回向院)に向かいます。当時の無縁寺の山門は隅田川を臨んでいましたが、今は幼稚園が建っています。山門からまっすぐに両国橋が架かっていた景色でした。

無縁寺は関わりを恐れて門内に入れなかったため赤穂浪士一行は両国橋東詰の広場まで移動しました。両国橋の東詰で怪我人を舟に乗せるため船頭に交渉したが、船頭たちにも恐れられ協力を得られなかったのでやむを得ず歩いて泉岳寺に向かうことにしました。このタイミングで、佐藤條右衛門は奥田孫太夫から列から離れた方がいいと諭され、いったん堀江弥兵衛宅へ戻り家族に討入り成ち功を知らせ、しばらく休息してから近松勘六の下僕甚三郎と共に泉岳寺へ向かうことにしたそうです。

■ 豎川一之橋から新大橋へ



一之橋へ向かう



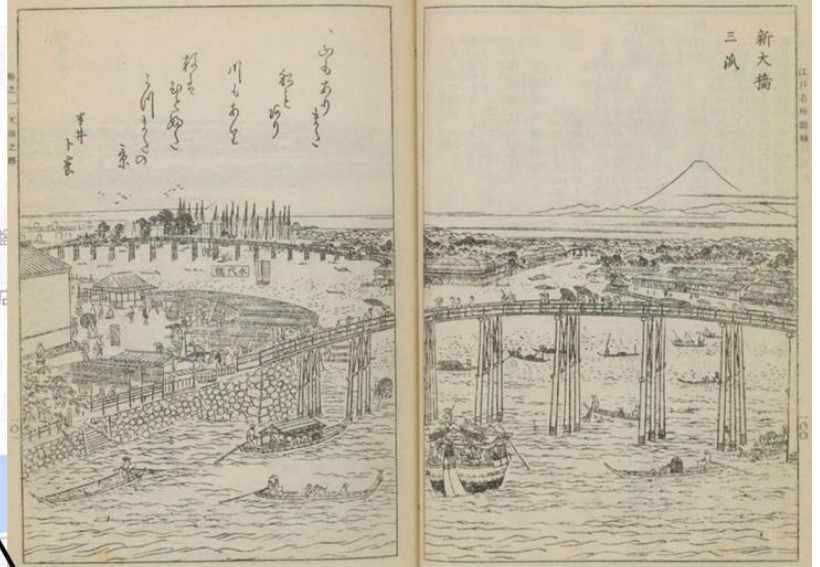
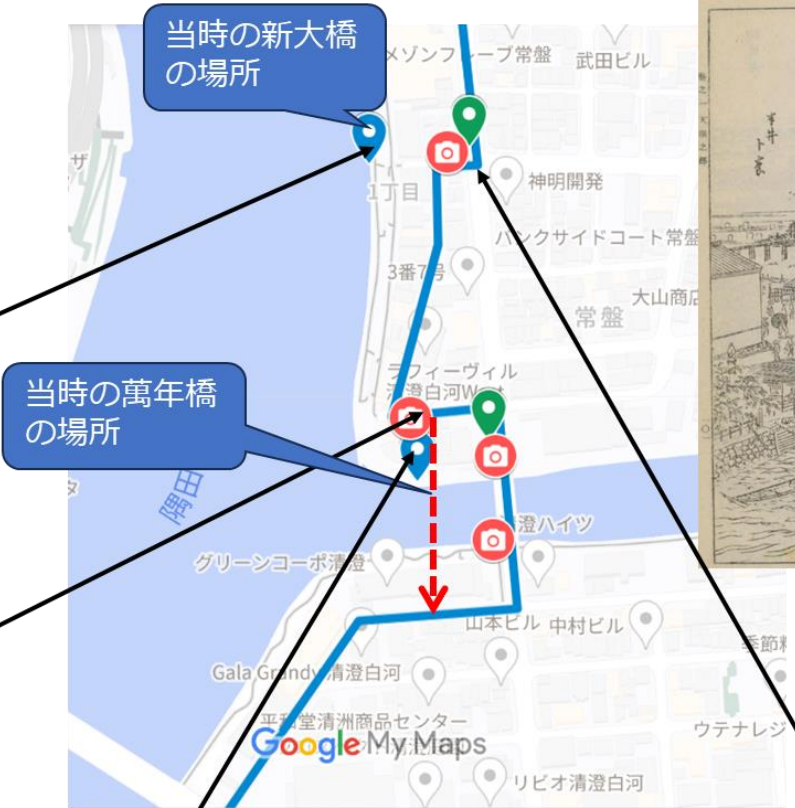
この道は関東大震災以後にできた道で、江戸時代の道と符号しない



豎川水門

赤穂浪士一行は豎川に架かる一之橋を渡ります。ここの道筋は関東大震災後に出来た道なので江戸時代の道と符号しませんが、江島杉山神社があり、幕府の船を格納する御船蔵がありました。

■新大橋から万年橋



現在正木神社が残っている細い道にまっすぐ万年橋がかかっていました。赤穂浪士達が歩いたのはまさにこの道です。



次に見えてくるのは新大橋です。現在の新大橋よりかなり上流に架かっていました。赤穂浪士一行は新大橋東詰で怪我人や老人を駕籠に乗せようとしてしました。新大橋東詰めには広小路もあり、荷揚場・舟番所などがあり江戸の市民で賑わう場所だったので、駕籠屋の溜まり場でもありました。駕籠屋は難波をしめしたが、頼み込んで雇ったようです。近松勘六、横川勘平、間瀬久太夫、神崎与五郎、間喜兵衛、村松喜兵衛、堀部弥兵衛、奥田孫太夫、木村岡右衛門らが駕籠に乗りました。この頃空が明け始め、吉良邸討入りのことが広がり赤穂浪士の隊列についてくる市民が出始めます。

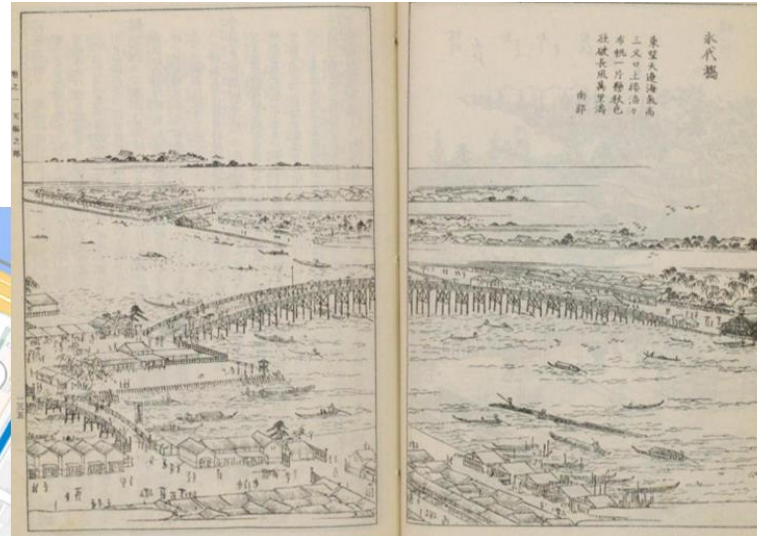
■ 万年橋から永代橋へ



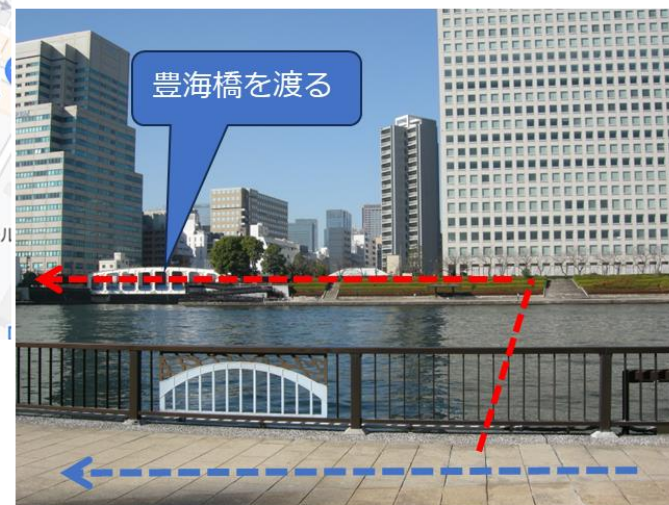
現在の万年橋を渡ります。江戸時代には道の右手にはすぐに隅田川が見えていたと思いますので、隅田川テラスに降りた方が当時に雰囲気に近いと思います。途中江戸時代の永代橋があった場所に案内プレートがあります。



当時の永代橋の場所



永代橋から見る石川島



豊海橋を渡る

甘酒粥を振る舞われた・・・ほんとかな？



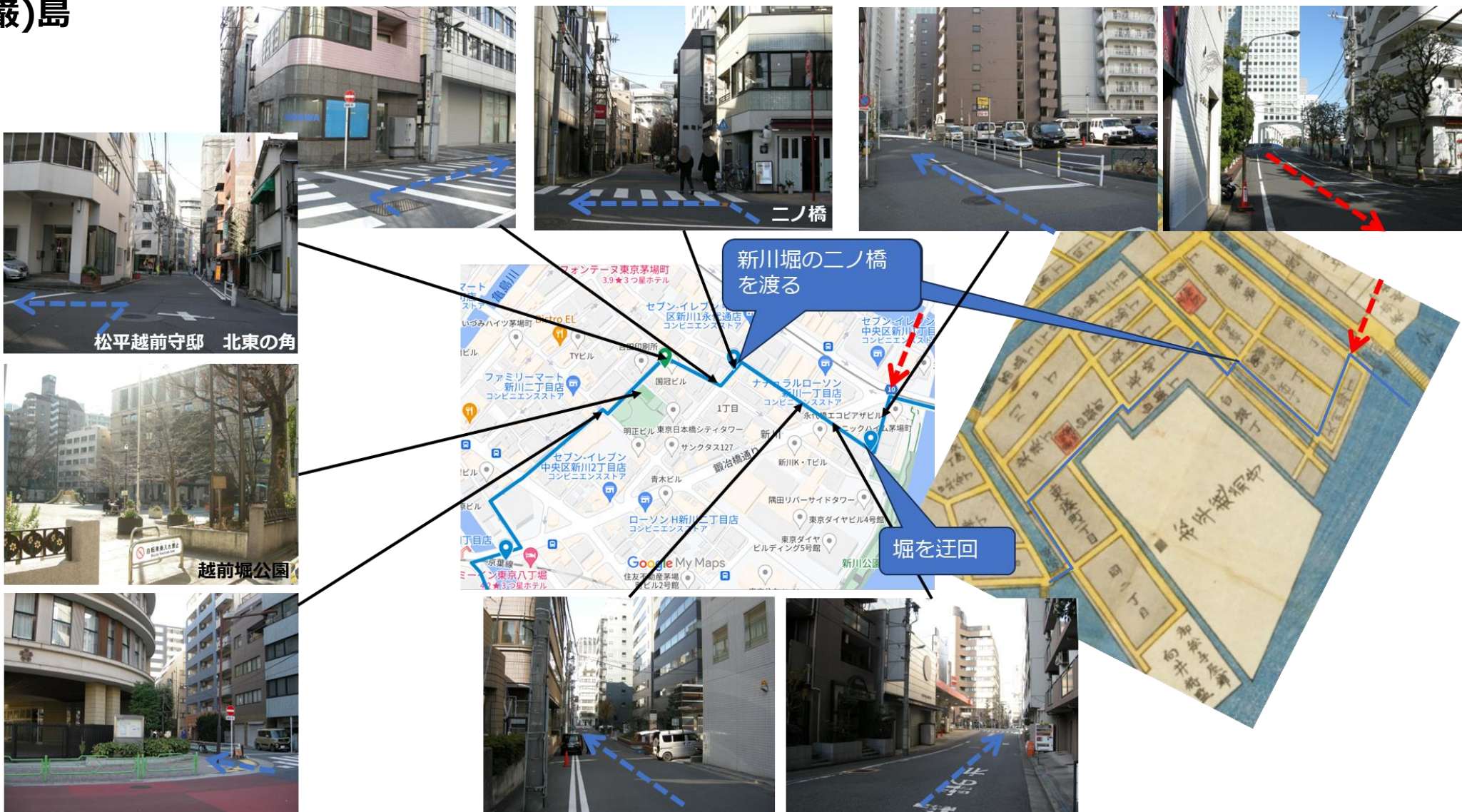
赤穂浪士休息の碑

当時の永代橋も現在より上流に架かっていました。赤穂浪士達は永代橋を渡ってすぐに豊海橋を渡ったのですが、私は現在の永代橋を渡りました。永代橋から見える超高層マンションは江戸時代は人足寄場があった石川島です。

永代橋の側に赤穂浪士休息の碑があります。竹口作兵衛が元禄元年(1688年)に永代橋際で味噌醸造を始め「乳熊屋作兵衛門商店」としました。この人が宝井其角に師事し大高源五と俳諧の友だったため泉岳寺に引き上げる途中に甘酒粥を振る舞って労をねぎらったとされて江戸名所となりましたが、当時の永代橋よりも南にあるなどから史実かどうかははっきりしません。ちなみに、江戸の味噌というとしょっぱい味噌だったと思うかもしれませんが、江戸庶民に好まれたのは、「江戸甘味噌」という光沢のある茶褐色の味噌。田楽やどじょう汁、土手鍋などの江戸料理に使われました。ちくま味噌さんのオンラインショップで購入できます。

この辺りは深川黒江町といい、奥田貞右衛門、奥田孫太夫が住んでいました。

■ 霊岸(霊巖)島



永代橋を渡った赤穂浪士達はいよいよご府内に入ります。この辺りは霊巖島と呼ばれて、松平越前守の屋敷とそれを取り巻く堀がありました。赤穂浪士達たちは堀を避け、橋を渡って歩いて行きました。堀は現在すべて道路になっていますが、赤穂浪士達の歩いた道筋は今も残っていますが、目印になるものがないので道をたどるのが非常に困難なエリアでした。当時の雰囲気くみ取れるのは「越前堀公園」という名だけです。

このあたりで町人が耳にした会話が赤穂市が刊行した「聞書」に残っています。「ことのほかくたびれた。この程度のことでそれほどくたびれるはずはないのに」「安堵したから疲れたのだ」「手傷は痛まないか」「嬉しさに痛みもわからない。3人まで討ち取ったが見られたか?」「確かに見た、鋭い働きであった」赤穂浪士達は、この辺りではお互いを称えあいながら歩いていたようです。

■ 浅野内匠頭屋敷付近



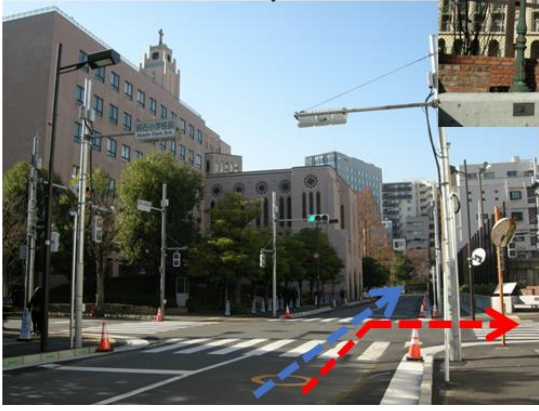
この先に浅野家の江戸屋敷があるが、江戸時代の町並みを全く想像できない！



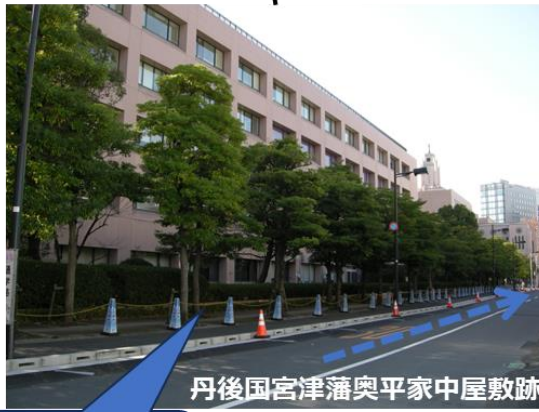
村松喜兵衛借宅



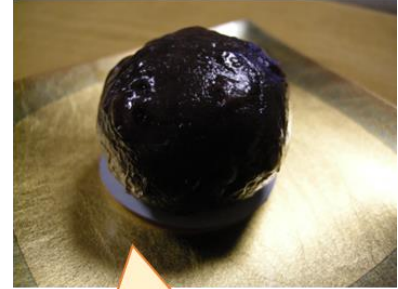
塩瀬という和菓子屋さんの本店があります。塩瀬は貞和5(1349)年に日本で初めてまんじゅうを作り売り出したという創業670年にもなるお店です。家康が江戸入りの頃に江戸に出店したらしいので、浅野内匠頭も赤穂浪士たちも塩瀬のおまんじゅうを食べたかもしれません。写真は「本饅頭」で餡が極薄の皮に包まれているもので、家康が戦のときに本饅頭を兜の上に置き、黒本尊に供えたと言われるものです。家康のみが食べられるお菓子だったようです。



桜井惣右衛門の尋問を受ける



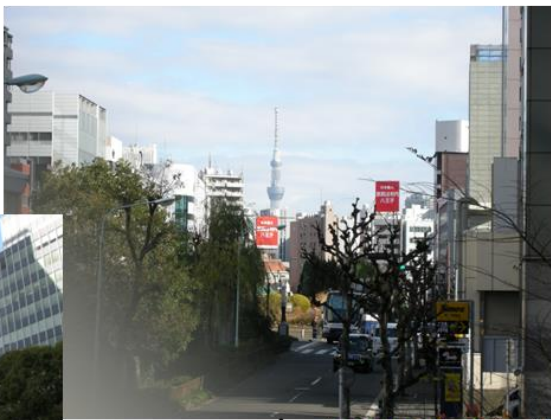
丹後国宮津藩奥平家中屋敷跡



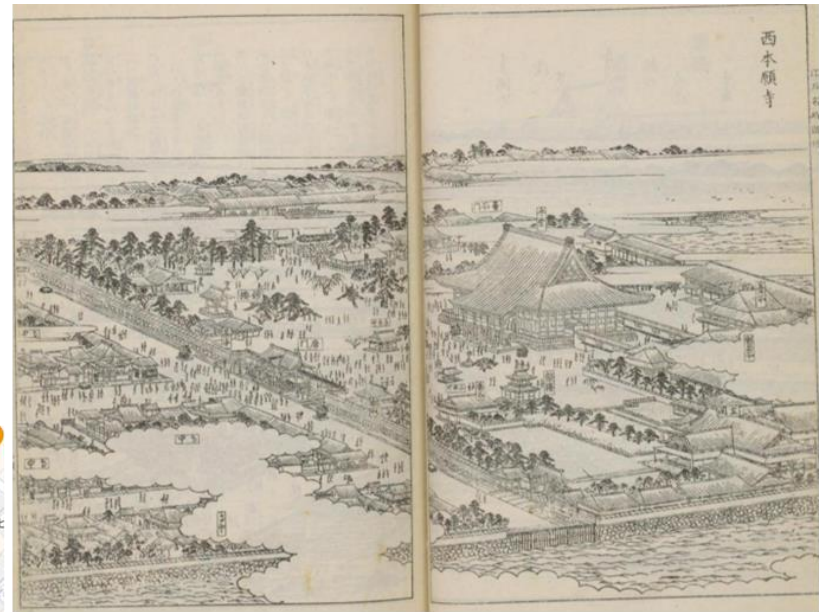
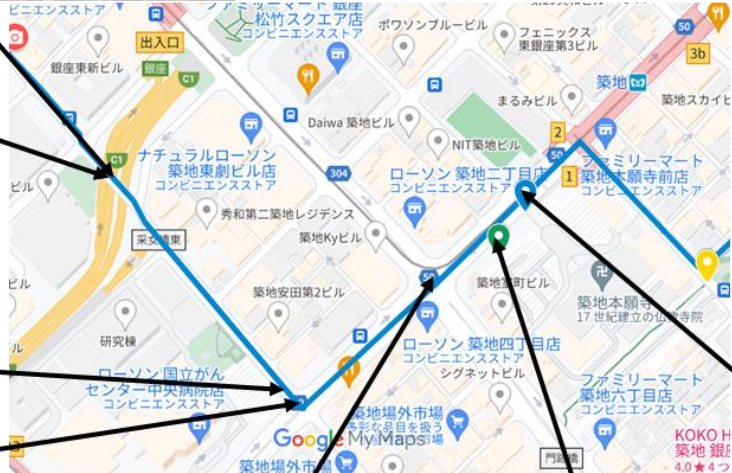
家康好みの本饅頭
お土産に♡

聖路加国際病院の場所には丹後国宮津藩奥平家の屋敷がありました。ここは磯貝十郎左衛門の兄、神谷成右衛門が士官していたが、赤穂浪士一行は桜井惣右衛門という藩士に尋問を受けることとなります。尋問に答えたのは奥田孫太夫だったそうです。「旧冬の12月15日の朝6時過ぎ、浅野内匠頭家来47士が吉良邸へ討入り、引き上げの途中、当家の門前をその一団20人ばかりが通った。槍や長刀は鞘も無く、白き木綿布で刃のところを巻き込んでいた。吉良様の首と思われるものは白き布に包み長刀の柄にかけ2人で担いでいた。その様子が異様なので自分は尋問しないわけに行かず進み出た。」と生々しい描写が書き残されています。奥平家を過ぎると、自分たちの元主の屋敷の真後ろに出ます。今はまっすぐ道が通っていますが、赤穂浪士達は北寄りの石川家との間の道を進み軽子橋を渡って築地川を越え、川向こうから自分たちの仕えた屋敷をみるようになったのでした。ルートも今は歩くことができませんので、このルートで築地川跡を渡り西本願寺に向かいます。西本願寺の後方のあたり、築地小田原町2丁目には、村松喜兵衛と妻子の借宅がありました。

■ 築地



江戸時代はこの左側は堀で道はなかった



築地本願寺



間新六の墓

西本願寺は間新六の姉の嫁ぎ先の菩提寺であったことから、間新六は後々の自分の供養を頼み、堀越しに金子と槍を境内へ投げ込んだと伝えられています。その時の槍は今でも寺宝として保存されているとともに、切腹した四十六士の中で間新六だけが西本願寺に埋葬されました。

銀座



新橋演舞場の前を通り過ぎると銀座に入っていきます。路地から歌舞伎座が見えますが、歌舞伎座のあたりは浅野大学の屋敷でした。昭和通りを渡ってみゆき通りに入ります。赤穂浪士達がこんな銀座のどまんなかを歩いていたとは驚きます。香蘭社ビルのところでみゆき通りを曲がっているの当時は三十間堀があったので直進できなかったからです。一行は堀に沿って歩いていき汐留橋を渡ったのでした。汐留橋は現在は首都高になっているため、迂回する横断歩道を使いました。天下の首都高の下側に頭がつきそうです。こんな構造になっている東京、、、つくづく無理矢理な都市デザインであると感じます。

■ 汐留

公儀使役の大堀庄助
亮隆(300石)に誰何
される



伊達陸奥守上屋敷跡

磯貝十郎左衛門ら借宅



松平肥後守中屋敷跡



旧東海道

本来の汐留橋を渡ったところに汐留の再開発で発掘された汐留駐車場があります。ここは脇坂淡路守の屋敷でした。屋敷に沿っている道が旧東海道です。その先が伊達陸奥守、松平肥後守の屋敷が並んでいました。赤穂浪士たちが伊達家の門前を通過しようとしたところで誰何を受けるました。対応したのは公儀使役の大堀昭介という300石の藩士で、事情を聴くと感激し礼をつくして通過させたとのこと。

新幹線のガードの辺りで旧東海道が分断していますが、このあたりを源助町といい、磯貝十郎左衛門、茅野和助らが住んでいました。松平家でも審問しようとしたが、伊達家が通過させているのを見てそのまま通したということです。

■浜松町

赤穂浪士一行は、旧東海道を直進せずここで曲がっていますが、当時はここに桜川という川があったので直進できませんでした。道筋を見ると、川の霧困気が見て取れると思います。通り町筋、現在の国道15号に出て桜川に架かっていた宇田川橋を渡りました。通り筋からは芝大神宮、その先に増上寺が見えてきます。浜松町には、赤埴源蔵、矢田五郎右衛門らが住んでいました。



「更科布屋」は、寛政3 (1791)年創業のお蕎麦屋さんです。討入りは1703年なので、当時ここにおそば屋さんはありませんでしたが、そばの実に近い部分だけを使用した更科そばに季節の香りを打ち込んだ変わり蕎麦がおすすめ。1月は唐辛子、4月はよもぎ、5月は山椒、季節ごとに色がきれいでおいしいお蕎麦が楽しめます。



蕎麦と変わり蕎麦と更科の3種盛り

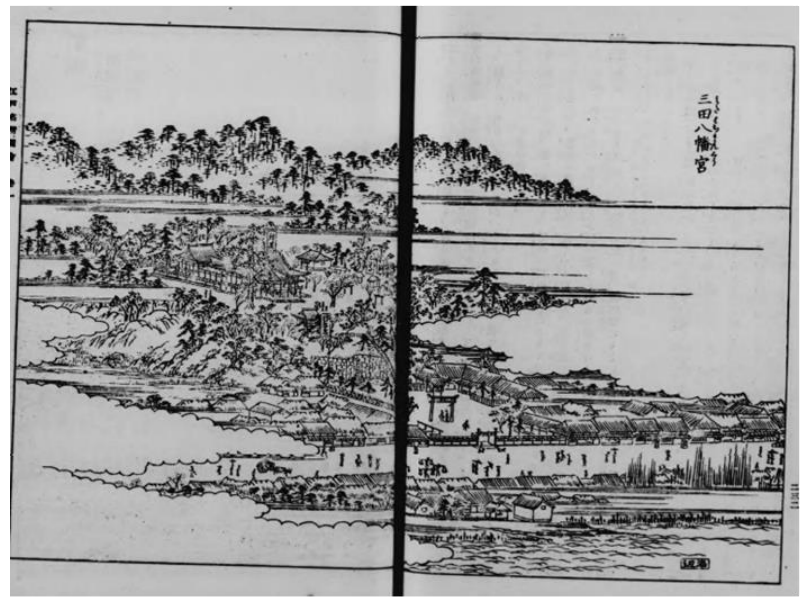




浜松町を過ぎると金杉橋に出ます。ここには屋形舟の船宿がありますので、船だまりの景色が見られます。この上流に「しょうらん橋」があり、その近くに磯貝十郎左衛門の兄の家があり病気の母が身を寄せていました。大石はそのことを知って、磯貝に母に会ってくるようにすすめたが、追手がいつくるかもしれないと断ったそうです。

このあたりは落語「芝浜」の舞台であり、芝雑魚場と呼ばれる魚場がありました。「芝エビ」は本来このあたりでとれた特産です。江戸時代から続いた漁場ですが、漁業権を放棄したのが昭和43年、完全に埋め立てられて公園になったのが昭和45年です。そしておなじみ、薩摩藩の蔵屋敷がここにあります。その向かい側一帯は後に浪士たちを預かる水野家がありました。

■ 札の辻から三田八幡神社



江戸時代は海が見えただろな・・・



三田八幡神社



札の辻

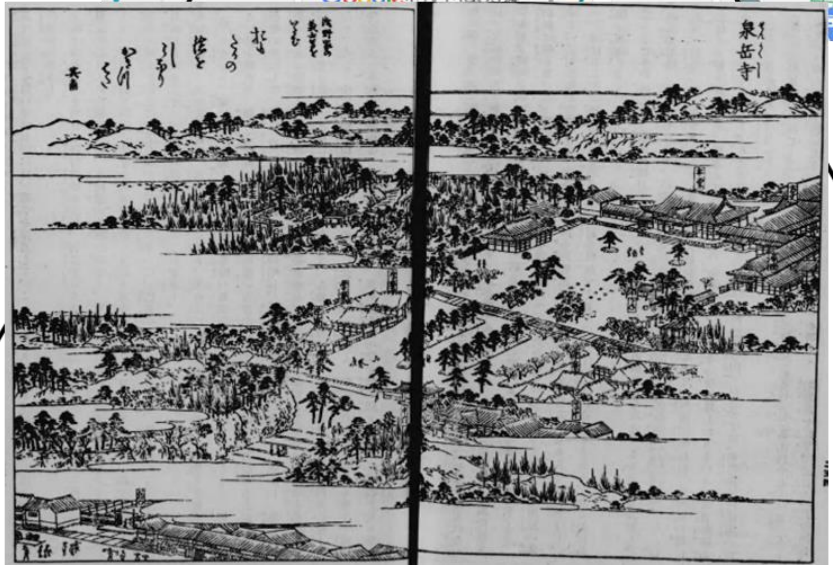
札の辻という名前が残っている通り、ここには高札場がありました。この辺りではさすがに浪士たちも疲労困憊であり、間新六は道端にぼったりと倒れこんでしまったといいます。父親の喜兵衛に「もう少しだ」と励まされて立ち上がって泉岳寺に向かいました。

三田八幡神社まで来たところで、一行の前に脱盟した高田郡兵衛が酒樽を持って現れたという話が水野家医師が書いた「赤穂士話」に残されている。群兵衛は麻袴で正座して「今朝本意をとげられたことはおめでたいことである。一献参らんと酒樽をお持ちした」といったらしいが、誰も相手にしなかったようです。

■ 高輪大木戸から泉岳寺



泉岳寺山門



泉岳寺山門跡

三田八幡を通り過ぎると見えるのは高輪大木戸跡です。東海道から江戸府内の入り口として、また南の出入口とされた大木戸ですが、赤穂浪士一行が歩いたときはここに大木戸はありませんでした。札の辻のあたりに芝口門があったとか、芝口門は銀座八丁目あたりに1710年に設けられたとか不明点があります。

国道15号に沿った都営浅草線の泉岳寺駅の入り口があるあたりから泉岳寺の山門がありました。泉岳寺到着は午前9時ごろ。駅伝のゴールのような人出だったようです。群衆の中に吉良邸にも来ていた大石無人・三平親子、細井広沢、佐藤篠右衛門、甚三郎などがまぎれ、大石ら四十七士から書状や形見の品々を受け取っていたという話が残っています。

■おまけ



J R 高輪ゲードウェイ駅近くの国道15号線沿いに「高輪海岸の石垣石」が残されたスポットがあります。浮世絵『東京高輪風景』は明治の頃の高輪海岸を描いたものですが、江戸時代の東海道は海岸に沿って石垣が組まれていた様子がわかります。石垣には主に相模湾岸から伊豆半島周辺で採掘された安山岩が用いられたそうです。

2-2 引き上げルートを歩いた感想

12kmを歩くのは結構大変！

- ・前日も討入りの準備で寝ていない、さらに2時間近く討入りをした後に泉岳寺まで歩いている。江戸時代の日本人の体力はスゴイ！

引き上げルートは事前に決まっていたのか？

- ・引き上げルート上に赤穂浪士達の潜伏先がある。
引き上げ時に臨機応変に道案内ができるように戦略的には配置していたのではないだろうか。

潜伏先で赤穂浪士と気づかれなかったのだろうか？

- ・結構あちこちに潜伏している。方言もあるだろうし、多くの協力者のもと潜伏していたのではないかと感じる。

吉良側は討入りをどこまで知っていたのだろうか？

- ・屋敷のすぐ側にまで赤穂浪士の潜伏先があり見張られていた。江戸市民もいつ討ち入るかと噂になっていた。実は覚悟して討ち入らせた？

謎は尽きない、赤穂事件はやっぱり面白い！

以上をもって『フィールドワーク赤穂事件』の発表を終わります。

【参考文献】

- 児玉 幸多 (1974) 『日本の歴史16 元禄時代』 中公文庫
(財)中央義士会 (2006) 『赤穂義士の引き上げ -元禄の凱旋』 街と暮らし社
大石 学 (2007) 『元禄時代と赤穂事件』 角川選書
古川 愛哲 (2008) 『九代性分は女だった!』 講談社
黒田 涼 (2009) 『江戸城を歩く』 祥伝社新書
山本 博文 (2012) 『これが本当の「忠臣蔵」』 小学館

Gakken Mook ゼロからわかる忠臣蔵 学研 2012年12月14日発行
TOWN Mook 忠臣蔵と日本人 徳間書店 2012年12月18日発行

【HP】

千代田東京ネット <https://chiyoda-tokyo.net/hirakawamon/>
国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/>
Google map <https://www.google.com/maps>